

アメリカの社会と文化に関する総合的研究

A Comprehensive Study of American Society and Culture

主任研究員名：樋口 忠成

分担研究員名：宮田 実、神崎 ゆかり、矢嶋 巖（非常勤講師協力者）

プロジェクト研究の意義と中間報告

このプロジェクト共同研究に参加する研究員は、それぞれの専門分野の中でアメリカを対象とする研究に従事してきた。しかしアメリカの社会や文化やそれらの動向を理解するには、こうした個別的な視点からの分析では限界があり、個々の研究者の研究内容を他分野の研究者が理解し議論してさまざまな観点から考察することによって、全体像を多角的に見極め、また個別的な視点に内容とふくらみを付け加えることができる。したがって、研究会では、個々の学問分野の専門的な話題についても、意識的に専門外からの疑問や指摘を尊重しながら議論して課題について深化し追求する姿勢をとって、「多面的」「多角的」「総合的」な観点と研究姿勢を尊重した。

2007年度の活動報告

2007年の共同研究活動として、具体的に三つの方向で研究会を開催した。

(1) 研究員による研究報告

- ・宮田実「アメリカ高等教育の特質」（2007年5月26日）

アメリカの高等教育専門誌である『高等教育クロニクル』記事を中心に話題提供を得て、現在のアメリカの大学教育の潮流について議論を行った。

- ・神崎ゆかり「アメリカにおける都市ゴシック小説」（2008年1月26日）

アメリカにおけるゴシック小説のテーマや特質を歴史的に整理し、特に都市ゴシックについてイギリスと比較したアメリカの特質に関して、背景としての人種問題をからめて紹介があった。

なお樋口研究員と矢嶋研究員の報告は日程の関係から次年度開催となった。

(2) 招待報告者による研究報告

- ・Noriko Fujii オレゴン大学教授「アメリカの大学事情」（2007年12月5日）

長年アメリカの大学で研究活動に従事しておられるFujii教授にアメリカの大学の研究、教育、教員、学生など、さまざまな観点から大学生活を紹介していただいた。

(3) 共通テーマの設定（科学研究費申請に関わって）

- ・「時空を越えるテーマ都市ラスヴェガスへの多面的アプローチ」（2007年9月22日から4回）

科学研究費の申請を契機として、プロジェクト研究の発展方向として、一つの共通テーマを「ラスヴェガス」として設定し、この研究テーマへのアプローチを4度にわたって議論した。

アメリカ都市の衰退と再生

樋口 忠成（教養部）

プロジェクト研究「アメリカの社会と文化に関する総合的研究」で、「アメリカ都市の衰退と再生」をテーマとして研究を進めてきたが、平成19年度は「ライトレールを導入するアメリカ都市」を研究課題として研究を進めた。

アメリカの大都市では、モータリゼーションの進展や都市部での高速道路の建設に伴って、都市の住宅は、都心の中心業務地区(ダウンタウン)からはるかに遠い郊外に進出していった。より良い住宅や緑豊かで静かで快適な環境の中に広い敷地を持つ住宅が建設され、上流クラスや中流クラスは中心都市を離れていったのである。こうした中上流クラスの郊外への人口移動は、単に住宅や人口の移動だけにとどまらず、小売業やサービス業の大規模な郊外化を促した。消費意欲が旺盛な所得層の郊外離散にともなって、郊外に大規模なショッピングセンター(モール)が建設されて、百貨店などの大型店はそのキーテナントとして郊外に進出したが、それとは逆に、ダウンタウンにあった旗艦店は客離れが進んで経営が難しくなった。1980年代から1990年代にかけて、ニューヨークやシカゴなど一部の例外を除くと、アメリカの大都市の都心からデパートが一斉に撤退してしまった。ここに象徴される都心の小売機能の衰退は、雇用の減少や歩行者の減少や犯罪の増加など、ダウンタウン全体の衰退減少の象徴的な一面に過ぎない。

ダウンタウンの衰退が大都市圏の衰退につながるという危機意識が芽生え、1970年代以降、さまざまなダウンタウン再生事業が各都市で実施されてきた。ダウンタウンの再開発、フェスティバル・ショッピングセンターの誘致、野球場、フットボール場、アリーナなどのスポーツ施設の建設、コンベンションセンターの建設など、ダウンタウンを再活性化するための施設が各地で建設された。これと同時に居住人口をダウンタウンに呼び込む試みが実施された。駐車場確保が困難で自動車交通が混雑するダウンタウンを公共交通利用者に便利な空間とする試みも実施された。大都市では地下鉄などの大量輸送の鉄道が建設されたが、そうした大規模な投資に見合う乗客を確保できないところで注目されたのがライトレールである。世界初のライトレールは1978年のカナダのエドモントンが最初とされるが、1980年代にはいると北アメリカやヨーロッパの多くの都市で採用されていった。アメリカでは、1981年に最初のライトレールがサンディエゴで導入されたのをはじめとして、ポートランド('86)、サクラメント('87)、サンノゼ('87)、ロサンゼルス('90)など、西海岸の都市から導入が始まった。1990年代に入ると、ボルティモア('92)、セントルイス('93)、デンバー('94)、ダラス('96)、ソルトレークシティ('97)など全米にそのブームは波及し、2000年以降もヒューストン('04)、ミネアポリス('04)、ニューアーク('06)、シャーロット('07)など新規導入都市が増えている。現在もシアトルやフェニックスで新規路線が建設中である。

平成19年度は、これら各都市のライトレール整備状況に関するデータを収集し、TOD(Transit-Oriented Development)の事例について検討を加えた。

アメリカ高等教育の特質

宮田 実（教養部）

アメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門紙『高等教育クロニクル』の記事の翻訳を通して、アメリカの高等教育の特質の研究を進めている。2007年度は2つの記事を翻訳し、大阪産業大学論集に発表した。

最初の記事は、2006年11月24日号の「アメリカの大学：40年の変遷」（大阪産業大学論集 人文科学編 122 2007年6月発行）である。『高等教育クロニクル』の創刊40周年を記念して特集された記事である。この40年間で変わった主な点として、増え続ける学生数に応じて増加した大学、公立と私立に在籍する学生の比率の変化、学生の構成比の変化、国際化した大学、高学歴化したアメリカ人、IT化による大学の変化、大学生の価値観の変化などが挙げられている。また、憂慮すべきこととして、公立大学に対する州政府補助金の削減、同僚間の協調性の欠如、教員の大学への忠誠心の低下、進まない構造改革が指摘されている。アメリカの大学はこの40年間で大きく成長した。しかし、成長と同時に多くの問題点も浮かび上がってきた。今後各大学はスペリングズ委員会が提起した問題点の解決に努力しなければならない。「数字で見る高等教育40年の変遷」は大学数、学生数、女子学生の比率、年間平均学費、図書館蔵書数などを1966年と2006年の数字を比較しており興味深い。

次に取り上げた記事は、2007年9月21日号の「アメリカの大学における肥満学生対策」（大阪産業大学論集 人文・社会科学編2）である。米国大学保健協会の試算によれば、大学生の3割が肥満状態である。今や大学は学生の肥満予防や肥満克服の手助けをしなければならない状況である。その方法として、カフェテリアでより健康的な食品の選択肢を増やしたり、栄養士を雇ったり、ウォーキング用の道を整備したり、専属トレーナーを雇ったりしている。学生の健康増進のためにお金をかけているファーマン大学では学生は健康増進のクラスを履修しなければならない。このクラスは週1回の講義と2～3回の運動からなる。学生は心臓血管の病気、がん予防、ストレス対処法、栄養学、運動の重要性などを学ぶ。ケンタッキー大学では子供たちに適正な栄養摂取や運動がいかに大切かを教える方策を検討している。これがうまくいけば、子供たちが将来大学に入学する頃には良い習慣が根付いていることになる。2006年、テキサスA&M大学ではキャンパス内で週1回農産物直売市を始めた。毎週数百人の学生や教職員が集まる。同大学では販売する農家の人たちに地元で採れた新鮮な有機栽培の野菜を売るよう交渉したのである。このように大学において様々な肥満対策が講じられておりその成果に期待したい。

アメリカにおける「都市ゴシック」小説の研究

神崎 ゆかり (人間環境学部)

プロジェクト「アメリカの社会と文化に関する総合的研究」の一環として、平成19年度はゴシック小説の中でも「都市ゴシック」と呼ばれる作品群に焦点を絞って研究した。

「都市ゴシック」といわれるジャンルは、18世紀にイギリスで生まれた初期のゴシック文学が「建物の構造と登場人物の心理的経験を密接に結びつけていた」ことに由来する。初期のゴシック小説では、登場人物のパラノイアや迫害は、城の部屋、地下牢、廃墟、修道院などで表象されていた。ところが、19世紀後半のいわゆる世紀末といわれる時代になると、代表的ゴシック小説の舞台は、城の部屋、地下牢、廃墟、修道院などから都市に移る。たとえば、R・L・スティーヴンソンの『ジキルとハイド』(1886)、オスカー・ワイルドの『ドリアングレイの肖像』(1891)、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(1897)などは、当時の大都市ロンドンを舞台としている。当時、拡大する都市では、その繁栄の裏にある労働者達のスラム街や路地裏での犯罪、不安定なアイデンティティ、狂気などに対する人びとの不安が顕著になりつつあった。このような19世紀のロンドン特有の環境が孕む闇の問題をゴシックの要素を利用して表現する作品が「都市ゴシック」である。

アメリカでも都市は未知の人々からなる不気味なものとなされ、都市を舞台としたゴシック小説は18世紀後半にすでに書かれていた。チャールズ・ブロックデン・ブラウンのフィラデルフィアを舞台とした『アーサー・マーヴィン』(1799)がそうである。ジョージ・リップードの『クエーカー都市』(1845)も同様にフィラデルフィアが舞台となっている。エドガー・アラン・ポーの探偵小説も、ゴシック的な都市を知ろうとする個人を描いている。19世紀になると舞台となる都市はフィラデルフィアからニューヨークへ移り、さらにはデトロイトやサンフランシスコなど多様化していく。

都市ゴシックのテーマは、マリー・マルヴィ・ロバーツが指摘しているように「人びとの疎外感からくる精神障害、パラノイア、分裂、自己喪失など」が主である。これらは現代社会にも通じるテーマであり、19世紀以来さまざまな作家達が扱ってきた。ゴシック小説そのもののモチーフは変化しているものの、この様式が絶えることなく作家達を魅了しているのは、そのテーマにみられる現代性であると考えられる。特に20世紀のアメリカでは、女性作家の作品に注目に値するものが多い。平成19年度は「都市ゴシック」の系譜を概観し、平成20年1月26日のプロジェクト研究会で発表、議論した。平成20年度は、都市を舞台とした20世紀後半の女性作家の作品を中心に研究する予定である。